The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『意味の論理学』における静的発生と動的発生について(1)
Author(s)	檜垣, 立哉
Citation	年報人間科学. 2005, 26, p. 133-154
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25891
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『意味の論理学』における静的発生と動的発生について（1）

檜垣　立哉

〈要旨〉

本稿は、ドゥルーズ前期の第二の主著である『意味の論理学』において、その全体構成を規定している〈静的発生〉と〈動的発生〉というテーマに関して、さしあたり前半部における〈静的発生〉の構成をたどり返すことを目的とするものである。

『意味の論理学』は、『差異と反復』において描かれた、ドゥルーズの生成の存在論を、言語と論理という事象に適応していくという側面をもつ。そこで言語における「意味」の位相は、「指示作用」「表示作用」「意味作用」とは異なった、言語を語る第四の次元としてとりだされる。こうした「意味」の位相は、「出来事性」や「特異性」に関するドゥルーズの存在論的議論と重ねあわされて論じられるのである。時間的・空間的に展開される生成の議論に、「意味」の探求は新たな局面を付け加える。

「意味」は、「意味作用」の観点からは「中立」的であり、パラドックスを引き起こすものであるが、またそうしたパラドックスを介してしか検討できない。「表層」とも位置づけられるそうした「意味」の位相は、しかしそれと同時に、「超越論的領野」としても機能し、言語の諸要素を構成していく場であるものと解明されていく。〈静的発生〉として記述されるのは、こうした「意味」の位相からの、言語の諸要素の構成のことである。「深層」の「身体」からの「言語」の構成は、〈動的発生〉の議論として、これに引き続いて展開される。

キーワード

ドゥルーズ　言語　出来事　生成　パラドックス

1・はじめに
――『意味の論理学』の構成と位置――

『意味の論理学』は、ドゥルーズ自身の思考の展開のなかで、ある種の屈曲をあらわにしている書物である。それがもつ位置づけは、論じきるのにいささか難しい。

この書物は、『差異と反復』において提示された「出来事」や、「理念」的な水準で語られるその存在概念に関する議論を受け、それを、『差異と反復』の段階では明確に描かれなかった言語や論理といった主題に向けて適応していくものである。しかしこの書物は、同時に、そうした議論を、まさに底部の方向に超えていくような力線を引くものでもある。そのような力線は、後期ドゥルーズが、ガタリとの共著において、前期の思考とは別の形態で仕事を始めていく軌跡と重なりあうとも考えられる。

つまり、二重の力がここで働いているといえる。一方では、この書物においては、『差異と反復』を、言語について論じるという方向から捉え返し、「意味」の場面を、とりわけ言語につきまとうパラドックスという装置を利用しながら、「出来事」の記述のなかに位置づけていくことが重要である。そこで、生成の存在論と「意味」の論述とが折り重なりあうことになる。それはまさに、「表層」において展開される、「意味の論理学」を描きだすことである。

「表層」の働きともいわれるこうした「意味」の領野は、この書物の術語でいえば、「二次的組織化」(l'organisation secondaire) という位相を形成する。そしてこのような「表層」の論理のなかで、最終的には「三次的配置」(l'ordonnance tertiaire) として言語的諸関係が「構成」されていく道筋を、ドゥルーズは「静的発生」(genèse statique) と名ざしていくのである。こうした「二次的組織化」の位相は、まさに『差異と反復』での「出来事」の場面と重なりあう。そこでの「発生」の議論は、「静的」と語られはするが、決して軽視されるべきものではない。

しかし他方、それと同時に、こうした「意味」の位相は、さらにその底部へと引き裂かれるように、根底的に無意味なものの力に晒されると描かれることにも着目しなければならない。「表層」の言語は、まさに、「深層」と記述される無底の深みへと落ち込んでいくのである。この「深層」の場面のことを、ドゥルーズは「一次的領域」(l'ordre primaire) と名指すことになる。そしてこうした「一次的領域」からの「二次的組織化」(＝「形而上学的表層」であり「超越論的領野」と論じられるもの) の形成の働きを、さらに「動的発生」(genèse dynamique) として論じていくのである。

「表層」である「二次的組織化」を論じるためにとりあげられるものは、ルイス・キャロルの作品であり、そこで描かれるさまざまなパラドックスである。しかし、「深層」の「一次的領域」において論じられるべきは、アントナン・アルトーの叫びであり、そのいっさいの分節化を欠くような「精神分裂的」な言語である。キャロル

とアルトーは、それぞれ「表層」と「深層」を語る代表として、この書物で重視される。

そして「表層」が、パラドックスに通じた「ストア派」のロジックと、そこでの「ユーモア」(humour) とを軸に論じられることと対比させるならば、「深層」において語られるべきは「前ソクラテス派」の「分裂症」的な世界と、そこでの「風刺」(satirique) である（「プラトン」的な「躁鬱的」体勢においてとりだされる「イロニー」(ironie) が、この両者の中間に組み込まれる）。

このように「表層」と対比される「分裂症」的な「深層」は、またメラニー・クラインが描きだす「前エディプス」的な世界でもある。ドゥルーズは、この書物の後半部では、「深層」からの「表層」の「発生」を描くために、まさにメラニー・クラインの提示する精神分析的な構図をそのままに借用する。そこでは、1)「口唇—肛門」的な「部分対象」あるいは「前性器的な性感帯」からなる、「深層」の「分裂症—パラノイア」的な体勢の位相、2) そこから「良い対象」が現れ（「ファロス」の性感帯的な接合）、「高さ」を介した「躁鬱」的な体勢が出現する段階、3) 最終的に「去勢」の「ファロス」が関わりあう「オイディプス的」体勢によって「性的表層」が現れてくる事態、この三つが、「動的発生」の具体的な行程として描かれていくのである。そして、こうした段階それぞれに対応する、1) ノイズ、2) 声、3) パロールというあり方において、言語の発生が根底から解明されていくと記述されるのである（これらの段階はまた、先に述べた、1)「前ソクラテス派」、2)「プラトン」、3)「ストア派」という区分にも、さらにそこでの1)「シミュラークル」、2)「イドラ」、3)「イマージュ」という、記述対象の区分にも重なりあう）。

つまりこの書物において、一面では、「表層」の言語的・形而上学的・超越論的な「意味」と「出来事」の場面こそが、「静的発生」が成立する局面として際だたせられるのだが、他面では、「深層」の身体的・精神分裂症的な位相が、パラドックスの語られる「表層」とは別の仕方での無意味として露呈されるのである。そしてそこで、「表層」が「深層」のロジックに従いながら現出することが、「動的発生」として解明されていくのである。

『意味の論理学』後半に関わる、こうした「動的発生」の議論は、「出来事」とその「個体化」の論理を（とりわけ「潜在性」が「現実化」していくルートとして）探っていく議論をおもなものとする、『差異と反復』の論述においては影に隠れていたものである。その意味で、こうした「深層」の提示は、ドゥルーズ自身の議論の展開を描くものともいえる。ドゥルーズが、この後ガタリとの共著において、アルトーの述べる「深層」の身体である「器官なき身体」(Corps sans organs) を、自らの議論のひとつの軸としていくことを考えても、こうした展開のもつ意味は大きいだろう。

しかし、とはいえドゥルーズは、これ以降の書物では、素朴に「深層」を論じるような姿勢をとらないことも考慮しなくてはならない。それゆえに、『意味の論理学』の位置づけの微妙さが現れる。たとえばドゥルーズは、この後には、「表象」と「深層」という区

分に興味がないという趣旨の発言もなしている（「ノマド的思考」『無人島』所収参照）。ここでは「深層」の領域を描くとされる「シミュラークル」という術語も、おおよそ姿を消すだろう。『アンチ・オイディプス』や『千のプラトー』において重視されるのは、「機械」という概念、とりわけ後者における「抽象機械」の概念である。そこでは「内在」というあり方が際だって重視されることになるが、それを「表層」と対比される「深層」と端的に形容することはなくなるだろう。

そもそもそこでは、精神分析的な事例に対するスタンスも変化する。『意味の論理学』においては、メラニー・クライン流の精神分析を、素朴といえるほどまでに基礎づけとして援用することが目についていた。しかし『アンチ・オイディプス』における精神分析批判を見るまでもなく（そこではメラニー・クラインの評価もアンビバレントなものになる）こうした構図はとられなくなる。そして（ガタリと共闘して生みだされる）独自の「分裂者分析」のただ中へと入り込んでいくのである。

つまり、『差異と反復』とは異なった、『意味の論理学』におけるドゥルーズの議論の展開は、ある意味では後期ドゥルーズの思考の方向性を指し示すものではあるが、しかしそれ自身としては、この書物に限定的な部分が多いとも述べうるのである。その意味で、この書物は、まさに屈曲した議論の展開をあらわにしている。

ただ間違いないことは、この書物が、後期ドゥルーズを彩るさまざまなアイデアの宝庫であることだろう。そうしたアイデアを、『差異と反復』での生成の存在論と連関づけながら論じていくことが、この書物の大きな特徴をなしている。

すでに述べたように、「器官なき身体」というアルトーの言葉（とりわけ第13のセリー参照）は、後期ドゥルーズの議論において、中心的な役割を演じることになる。無意識を、劇場ではなく「機械装置」として描く仕方（第11のセリーなどを参照）も、この書物から顕著になる。「定住的」なものと対比される、「遊牧的＝ノマド的」なものという「特異性」についての形容（第12のセリーなどを参照）は、これもまた後期ドゥルーズにおいて、スローガンのように際だたせられる。第15のセリーで描かれる「俯瞰」(survol) という術語は、『哲学とは何か』において再びとりあげられる。第27のセリーで現れる「精神的自動機械」という用語は、『シネマ』において重要な役割を演じていく。そして、この書物で散見される、「接続的」(connectif)、「連接的」(conjonctif)、「離接的」(disjonctif) という三項図式は、かたちを変えながら、『アンチ・オイディプス』の論述の骨組みをなすことになる（『意味の論理学』では「離接的」なものが、「一義性」との連関において重視されるが、『アンチ・オイディプス』では、「連接的」なものが、こうした三項図式をとりまとめるものとして描かれていく）。

『意味の論理学』における構成とその位置づけを、このように確認しながら、この論考では、『意味の論理学』の内容を、「静的発生」と「動的発生」との二つの軸から検討してみることにしたい。

2・「意味」と「パラドックス」

＜言語を語る三つのカテゴリーと「意味」＞

ドゥルーズは、「意味」を論じるための前提事項として、言語を語る三つのカテゴリーを提示する。それは、「命題」の三つの次元をなしている。「意味」の位相は、この三つの次元とは混同されないものである。「意味」はまさに、「命題」の「第四の次元」としてとりだされなければならない。しかしまずは、こうした「命題」の三つのカテゴリーから検討しよう。それらは、「指示作用」(désignation)、「表出作用」(manifestation)、「意味作用」(signification) と描かれるものである。

「指示作用」は、「命題」の、「個体」化された「対象」との関わりを示している。それは「真」(vrai) と「偽」(faux) というあり方で、「命題」と「事物」との関係をあらわしている。

「表出作用」は、「語る主体」に関わるものである。それは「人称」的なものの領域にとりわけ連関する。そこでは、「主体」の「表出」として、「真実性」(véracité) と「欺瞞」(tromperie) というあり方がとりあげられる。それは、「表出」する主体としての「人称」の領域に関する「命題」の機能なのである。

最後に「意味作用」が残っている。それは、「普遍」もしくは「一般」に関わるような「概念」的・シンタックス的な結合が問われる場面である。この領域では、まさに「真理の条件」(condition de vérité) が提示されるのである。

ドゥルーズは、第3のセリーにおいて、こうした「命題」の三つの次元の相互関連を、さまざまに検討していく。

「指示作用」は、具体的に存在する個々の「対象」への「命題」の関わりであるが、それが機能するためには、そうした指示を行う「主体」が必要である。だから「主体」のなす「表出作用」が、「指示作用」を可能にするともいえる。しかし「指示作用」と「表出作用」は、それらが「真理」の領域に関わる限り、結局はそうした「真理の条件」を保持している「意味作用」に依存することにもなる。

言い換えてみる。「表出作用」の優先性は、もともとは「パロール」という言行為の領域を考えたときに現れるものである。それは、「指示」に際して、「命題」が「表出」される行為性に連関する。だから、その立場からすれば、「表出作用」は「意味作用」に対しても優先している（「自我」の優先）。だが、「パロール」の領域を想定するならば、それと同時に、「ラング」という言体系の場面も考慮しなくてはならない。「ラング」の領域とは、まさに「意味作用」が機能する場面である。そこでは「指示作用」も「表出作用」も「意味作用」に基礎づけられることになる（「世界」と「神」との優先）。

だがそこでも、「意味作用」が機能するためには、それは「指示作用」を前提としていると述べられてしまう。「命題」の「意味作用」は、「命題」とそれが「指示」する事物の状態との連関を、つ

まりは「指示作用」の機能を前提とするとされるのである。またそうした「指示」という前提への遡及は、「意味作用」の枠内で考えるならば、必然的に無限のもの（パラドックス）になる。そこでは「指示作用」があらかじめ与えられていることが必要とされるのである。

まとめよう。まず、「指示作用」「表出作用」「意味作用」として描かれる「命題」の三つの次元は、それぞれ「事物」「人称」「概念」の「命題」への連関を示すものであった。そしてこうした三つの次元は、まさに円環をなすように、相互依存していると語られるものであった。

ではそこで、「意味」(sens) はどうなるのであろうか。

ドゥルーズはここで、「第四の次元」として、以上の議論とは別の水準に「意味」を描きだしていく。それは次のように語られる。まず「意味」は、「事物」と関わりをもつ「指示作用」と混同されるものではない。「意味」は、「指示作用」のもつ「真」「偽」という規準とは関わりなく、むしろ「真」「偽」に先立つ領野として自存するのである。「意味」の領野には、「一気に」(d'emblée) 身を置かなくてはならないと記述される（ベルクソンが、記憶の領域に「一気に」入り込むと語ったように）。

また「意味」は、「主体」の「表出作用」のなかに存在するのでもない。「意味」が「人称」と関わるとしても、そこでは、「パロール」が「ラング」を必要とするように、「意味作用」の働きが求められてしまうからだ。そこでは「意味」は、「意味作用」の方に逃れ去ることになる。

しかし「意味」は「意味作用（＝記号作用）」と同一視できるものでもない。「意味作用」は、「命題」が「真」である場面を求めながら、さまざまな命題の「可能性の形式」に展開されていく。だがこうした「可能性の形式」は、結局はそれが「条件付ける」ものである、「指示作用」へと回帰していくものであった。だからそれが機能するためには、こうして回帰していくような「条件付けられたものの形式」とは異なった、「何らかの条件付けられていないもの」(p.30) を必要とするのである。だからドゥルーズは、「意味」を「意味作用」と重ねあわせることも拒絶する。

こうしてドゥルーズは、「指示作用」「表出作用」「意味作用」が描く円の外部に、「意味」そのものを設定しなければならないと述べるのである。

つまり「意味」は、「指示作用」「表出作用」「意味作用」とは異なった位相に見いだされなければならないのである。すなわち、それらが連関する「個体的な事物の状態」にも、「個人的な信念」にも、「普遍的で一般的な概念」にも還元されないものとして (p.31) 提示されなければならない。そうした事態を描くには、どうすればいいのか。

ドゥルーズは、こうした「意味」を、「命題の表現されたもの」「事物の表層にある非物体的なもの」「還元不可能な複雑な実体」と規定していく (p.30)。そして、そこでドゥルーズは、「出来事」(événement) と、「意味」の領域とを重ねあわせていく。

このように「出来事」と結びつけられる「意味」は、つぎのように描写される。

まず着目するべきは、「意味」は、「指示作用」「表出作用」「意味作用」が関わる「事物」「人称」「概念」のように、「実在」(exsister)するものとは語られないということである。それは insister（内部存在）もしくは subsister（下位存在）するというように、いささか特殊な言い回しによって、その存立が描きだされることになる。

「実在」するものではない、こうした「意味」の位相を、ドゥルーズは、「超存在」(extra-être) とも語っていく。このような「意味」は、「事物」や、その水準での受動能動に関わらないがゆえに、「非実効的」(inefficace)、「非受動的」(impassible)、「不毛」(stérile) といった形容詞が付せられるものでもある (p.31)。

またそれは、「事物」の「意味」を表現しはするが、「事物」それ自身とは混同されないという観点から、フッサールのノエマ概念との近接性が述べられるものでもある。ドゥルーズはフッサールの名を引きながら、「意味」を「表現」(expression) の次元と語ってもいく。

まとめよう。insister（内部存在）もしくは subsister（下位存在）する、こうした「意味」とは、「命題」が「指示」する「事物」、「命題」において「表出」される「表象」、「命題」が「意味作用」する「概念」とは区分されて提示されるものである。だから、「意味」とは、「事物」がもつ「個体的」(individué)・「特殊的」(particulier) なあり方、「表出」主体がもつ「人称的」(personnel) なあり方、「概念」がもつ「普遍的」(universel)・「一般的」(général) なあり方をとるものではない。「意味」はまさに、こうした諸事情に「中立的」(neutre) なものとして描かれるのである。「表現」するものである「意味」の、「非実効的」で「中立」なあり方を見いだすことが、ここでまずは重要だったのである。

では、このように記述される「意味」を語ることは、どのようになされるのか。そこでパラドックスという事象がとりあげられることになる。「意味」の領域とは、「事物」「人称」「概念」が前提とするような、「方向性」や「同一性」（「良識」(bon sens) や「共通感覚」(sens commun) が規定するもの）をもたない領域である。だからそれを、とりわけ「概念」（「意味作用」）に関わらせて語るならば、ただちにパラドックスに陥ることになる。ドゥルーズは、こうしたパラドックスを介して、「意味」の領野に接近しようとするのである。

＜パラドックス・ナンセンス＞

「意味」を語るためには、パラドックスの場面に入り込まなければならない。それは、「意味」の領野でありながら、まさにナンセンスさを際だたせていくものとして描かれなければならない。

こうしたパラドックスについて、ドゥルーズは第5のセリーにおいて、その形式を四つに分類して説明する。だが、そこでパラドックスが四つに分類されることには、あまり大きな意義はない。そこで素描されたパラドックスは、後の第11のセリー（と第12のセリー）

において、第5のセリーにおける分類とは全く無関係な仕方で、「意味作用」の二つのパラドックスと、「意味」の二つのパラドックスとに区分されて展開されていく。そして、そこでのパラドックスの形態には、第6のセリーにおける、セリー化という事柄そのものについての検討と、第7のセリーにおける、キャロルの述べる「秘境語」に関する分析とが結びついている。

こうした議論の伏線を念頭において、はじめから見ていくこととしよう。

まず第5のセリーにおいては、パラドックスの形式が四つに分類されて提示される。それらは、「意味」の「無限退行」を示す「退行」のパラドックス（「意味」を「名」で「指示」しようとする試みは「意味」そのものを掴みかねるために、ついで「意味」を「指示」する「名」の「意味」を「指示」する「名」がさらに必要であるというように、次々と無限に増殖した「名」を連ねることに陥っていく）、「不毛」な「二重化」のパラドックス（「命題」における「非実効的」な「意味」を、まさに「命題」の「不毛」な「二重化」として見いださなければならないこと）、「中立性」のパラドックス（「意味」の領野が、量・質・関係・様相のそれぞれの場面から見て「中立的」(neutre) なものであること）、「不条理」のパラドックス（「意味」そのものは、「不可能」な対象を指示しうるということ）、これらである。

ここでパラドックスは四つに分類されるものの、議論は一貫して、「意味」の領野が、先に述べたように、「事物」「人称」「概念」といった「実在」との関わりには還元できない「超存在」の場面であることを確認するものである。「意味」は、「実在」とは別の仕方で描かれるそのあり方を、パラドックスとして際だたせるのである。

「意味」の領野は、「指示作用」によっても、「表出作用」によっても、「意味作用」によっても明らかにはされえない。それは「指示」をしようとすれば、無限に退行・増殖し、「意味作用」しようとするならば、「丸い四角」や「延長のない物体」といった例で示される無意味を露呈するものである。「意味」は、「命題」の三つの次元には収まりきらない、「不毛」で「中立的」な「超存在」としてとりだされなければならないのである。

つまり、この段階では、「意味」をそのまま論じることに伴うパラドックス性が提示されるだけで、その分類の試みは、さしあたりは「超存在」として insister（内部存在）もしくは subsister（下位存在）する、「出来事」としての「意味」を描くことに集約される。そのなかでは、第一に分類される「無限退行」のパラドックスが、範型的な役割を担うことになる。他のパラドックスは、「意味」の位相を説明するための、派生的なものにすぎない。

「意味」を語る際に、パラドックスを問題にせざるをえないという事態は、この後の第6のセリーにおける、セリー化の検討の場面で展開されていく。そこで、パラドックスを構成するセリーのあり方が主題になる。

「無限退行」のパラドックスは、「意味」を「指示」する「名」の「意味」が、別の「名」によって「指示」されつづけるというパ

ラドックスを描くものであった。こうしたパラドックスは、「名」の「指示作用」と「意味」に関わるものである以上、異質な二つのセリーの総合であると語られる（そこでは「指示」する「名」が一つのセリーであり、「意味」がそれとは異質なもう一つのセリーである）。

ドゥルーズはついで、こうした異質な二つのセリーを、「シニフィアン」と「シニフィエ」として規定していく。

そこで「シニフィアン」とは、「それ自体において意味の何らかの局面を提示する限りでの記号すべて」のことであるとされる。つまり「シニフィアン」とは、結局は記号の「表現」する「意味」の側面を示すとされる。そして「シニフィエ」とは、「意味のこの局面に対する相関的な役割」を果たすもののことであるとされる。こうした「シニフィエ」とは、「意味」に対する相関項としての「指示作用」「表出作用」「意味作用」のことを示すといわれるのである(以上p.51-52)。「無限退行」のパラドックスにおいては、「名」が示す「意味」＝「シニフィアン」と、それを「指示する」「名」＝「シニフィエ」とが、二つの異質なセリーをなすのである。

このように述べた上で、ドゥルーズは、「シニフィアン」と「シニフィエ」とが形成するセリーの本性をつぎのように描いていく。まず、この二つのセリーのあいだには、「ずれ」や「不均衡」があると述べられる。そしてこうした「ずれ」や「不均衡」は、つねに「意味」の方である「シニフィアン」のセリーが「過剰」であり、「シニフィエ」であるセリーが「不足」であることによって引き起こされるといわれるのである。

そして、「過剰」と「不足」として描かれる、こうした二つのセリーには、そうした「ずれ」を利用しながら、そのあいだを絶えず「循環」する、「パラドックス的審級」が関与すると述べられる。こうした「パラドックス的審級」が、「シニフィアン」のセリーでは「過剰」になり、「シニフィエ」のセリーでは「不足」するのである。「シニフィアン」の方には「空いている目」「余った席」があり、「シニフィエ」の方には「駒の絶え間ない移動」「席がなく常に移動する客」が認められる。駒と客は「パラドックス的審級」として、絶えず巡りあう。

まとめよう。パラドックスが引き起こされるためには、このように描かれる二つの異質なセリーと、そのあいだでの「循環」が必要なのである。一方では、セリーは「シニフィアン」（「意味」）としてつねに「余剰」の状態にある。「意味」は何によっても「指示」しきれないのだから、それはつねに余っている。他方では、セリーは「シニフィエ」（「指示」する「名」）として、いつも「不足」の状態にある。どんなに「指示」する「名」があったとしても、それは「意味」に対してかならず追いつけるものではない。そして、そうしたセリーのあいだの「不均衡」によって、「パラドックス的要素」である「名」が絶え間なく移動する。それは、「余った席」と「席のない」状態のあいだを移動する客のようなものである（さらに第8のセリーでは、こうしたセリーのあり方が、「構造」を描くための要件へと展開させられていく）。

さて、パラドックスとセリーについての以上の説明を受けながら、ついで第7のセリーで、ドゥルーズはいったん話題を変え、キャロルの提示する「秘境語」についての分析を開始する。こうした「秘境語」とは、二つのセリーが形成するパラドックスの、具体的な言語的事例と捉えられるものである。まずはドゥルーズの論述を追おう。

そこでドゥルーズは、キャロルの「秘境語」と、そこでのパラドックスの働きを、三つの種類に分類して論じていく。

「秘境語」の第一のものは、一つの文を短くして形成されるものである。それはただ一つのセリーの上での継起的な総合である「縮約したもの」を指しているとされる（例・Your royal Highness→y'reince）。こうした「秘境語」は、「接続」(connexion) に関わると述べられるが、そこではまだ、異質な二つのセリーに関わる、言語のパラドックスは現れない。

ついで第二に、異質な二つのセリーのあいだでの「共存」と「調整」を行う「秘境語」がとりあげられる。それは「循環するもの」として示される。ここでは具体的には、shark と snake という二つのセリーのあいだを調整する、snark という（パラドックス的な）「秘境語」が検討される。それ (snark) は、一方が「指示」するセリーであり、他方が「意味」のセリーである二つの語に関わる状態において、この二つのセリーを「調整」するものであると描かれる。

だが、snark という種類の語は、つぎにとりあげられる「カバン語」との区分が難しい。ここで典型的に「循環する語」として示されるものは、「空白の語」、つまり aliquid（何ものか）、cela（それ）、chose（もの）といった、いわば「名」もない語であるとされていく。それが、「余剰」する「シニフィアン」と、「不足」する「シニフィエ」の二つのセリーのあいだを「循環」するといわれるのである。こうした「秘境語」は「連接」(conjonction) に関わると語られる。

そして最後に「カバン語」といわれる「秘境語」がとりあげられる。「カバン語」においては、二つのセリーが、分離されながら維持されることが問題になる。たとえば、frumieux という（パラドックス的な）「カバン語」においては、その部分をなす、fumant と furieux が、分岐して総合されることが見いだされる。またやはり Richiam という「カバン語」においては、Richard と William が、そうした分岐した総合を果たしていくとされる。

こうした「カバン語」においては、第一の「秘境語」とは違って、一つの語が異質な二つのセリーを分岐させ、そうしたセリーを離接のなかに保持しつつ、分岐を増殖させていくことが重要であるとされる。こうした「カバン語」の機能は、「離接」(disjonction) に関わると述べられる。

さて、ドゥルーズは、こうしたセリーの検討と、キャロルにおける「秘境語」の分析とを受けながら、パラドックスの形態について、第11のセリー（と第12のセリー）において、先に語ったような、見通しのよい区分を提示していく。ここではその区分のうち、「意味作用」に連関する、二つのパラドックスから見てみよう。

そうしたパラドックスの第一の形態は、これまで何度も現れてきた、「退行」を巡るパラドックスである。こうした「退行的な総合」のパラドックスには、「連接的」な「秘境語」（つまり「意味」と「名」との二つのセリーのあいだを「空白の語」が「循環」し、それらを「調整」すること）が結びついている。

これは、「意味作用の決定」(p.85) を受け入れるがゆえに、パラドックスとして現出する第一のものである。「無限退行」とは、「意味」とそれを「指示」する「名」という異質な二つのセリーにおいて、それらが、「意味作用」の枠内にある「概念」や「特性」や「クラス」の水準と連関づけて記述されてしまう際に、「それ自体を要素として含む集合」として「形式的なレヴェルでの混乱」(p.86) をあらわにしてしまうことから引き起こされるパラドックスであるとされる。異質のセリーの連鎖は、「意味作用」として描くならば、それが含むものよりも「上位のタイプ」を提示していくと記述されるべきである。しかし「無限退行」をなす際には、「それ自体を要素として含む集合」が現れるという混乱が起こっているといわれるのである。「すべての集合の集合」というこうした不合理なものは、「異常な集合」(p.92) を形成するものと描かれる。（「連接的」なものにおいて）自らの「余剰」な「意味」を「指示」しようとする試みは、こうしたナンセンスの形式において「無限退行」に陥るといわれるのである。

そして、こうしたパラドックスの第二の形態は、「離接的」な「秘境語」（二つのセリーを無限に分岐させていくもの）と関わると述べられる。それは、「カバン語」に見られるように、一つの語において、二つのセリーを分岐させ、それを増殖させていくパラドックスである。そこで語は、二つの部分に分割されるのだが、その場合、分割される二つのセリーの潜在的な部分は、それぞれ他の部分の「意味」を「指示」するか、逆にその部分を「指示」する他の部分を表現する（そうした「意味」として機能する）。そのような仕方で「カバン語」は全体として、それ自身の「意味」を語り、やはりナンセンスな言葉となる。それが「離接的総合」のパラドックスとされるものである。

このケースも、やはり第一の形態と同様に、「意味作用の決定」を受け入れるがゆえに現出するパラドックスであると描かれる。こうしたパラドックスとは、結局のところ、自分自身が「前提としている集合を分割する要素」というパラドックスとして、「悪循環」(p.86) であると記述される。これは「反抗的な要素」(p.92) のパラドックスともまとめられる。自らがそこに含まれる集合を、その分岐する要素によって分割していくこうした「離接」のパラドックスが、「意味作用」において見いだされる第二のパラドックスなのである。

「それ自体を要素として含む集合」としての「無限退行」と、「前提とする集合を分割する要素」からなる「悪循環」。これらが、「意味作用の決定」を受けるがゆえに引き起こされる、二つのパラドックスの種類なのである。

ドゥルーズは、これらのパラドックスは、「指示作用」「表出作用」

「意味作用」が備えている、「真」「偽」の関係を引き写すものではないと論じていく。そこでは「真」「偽」を論じる排他的な関係とは別のものが語りだされるべきであると述べられる。それはまさに、「意味」の領域に入り込むことであるだろう。それは、「意味の論理学のもっとも一般的な問題」(p.85) を提起するものである。

しかしこうした、「意味」独自の領野の提示は、まずは「それ自身の意味を語る語」という、パラドックスに陥る語とそのセリーの検討によって、「示唆」することしかできないものであったのである (p.85)。

さて、ドゥルーズはついで、こうした「意味作用の決定」を受け入れるパラドックスとは別に、「意味の付与」(p.87) を行うパラドックスを論じていくことになる。それは、前者とは異なった仕方で提示される。なぜならば、「意味」の領野は、「意味作用」におけるような、「クラス」や「特性」への関連づけをもたないからである。では、「意味」に関わるパラドックスは、どのようなものなのだろうか。

ドゥルーズは、こうした「意味の付与」に関わるパラドックスを、やはり二つの種類に整理して論じていく。その一つは、「無限の下位分割」(subdivision à l'infini) のパラドックスである。そしてもう一つは「特異性の配分」(répartition de singularité) のパラドックスである (p.87)。

前者は、「出来事」の領域が、「現在」を逃れるものであり、それが「過去」—「未来」に「無限」に下位分割されることを示している。後者は、そこで提示される「特異性」が「遊牧的＝ノマド的な分配」であること、つまり開かれた空間における配分であることを示している (p.92-93)。この二つのパラドックス的な働きを語ることが、「意味」を「出来事」として論じることの中心的な内容になる。「意味」の領野における、時間性（「アイオーン」）と空間性（「トポス」）との展開を描いていく二つのパラドックスについて、ついで検討していくことにしよう。

3・「意味」と「出来事」

〈クロノスとアイオーン〉

まずは、時間的な展開から見ていこう。それは「出来事」＝「意味」の時間を、「クロノス」（＝「現在」の時間）と対比されてとりだされる、「アイオーン」（＝「永遠」の時間）として描いていくものである。「意味」のパラドックスの第一の場面においては、「意味」の領野を、こうした「アイオーン」という時間性によって捉えていくことが重要なのである（あらかじめ述べておけば、ここでの「クロノス」と「アイオーン」との二元論的な対比は、後に「深層」の領域において「悪いクロノス」が描かれる場面——第23のセリーなど——では、根本的に変容を被ることになる。しかし、「静的発生」が語られるこの段階では、「事物」に関わる「クロノス」と、「生成」する「出来事」に関わる「アイオーン」との二元性は有効である）。第1のセリーや第2のセリー、あるいは第10のセリー（や第12のセ

リー）で描かれる、この二つの時間の対比は以下のようである。

「クロノス」とは、「事物の状態」(état de chose) を示す時間である。それは「現在」としての時間のことを指している。そこではつねに「限定された現在」があり、原因と結果とが因果的に連関づけられている。「未来」と「過去」とが語られるとしても、それらは「生ける現在」である「クロノス」の内部に「縮約」されたものとしてしか捉えられない。「クロノス」は基本的に、「現在」を中心とした、物理的・周期的な時間なのである。

パラドックス的ではない、「クロノス」としての時間においては、「良識」が支配している。「良識」とは何よりも、「一つの方向＝意味」を定めるものである。だから「良識」においては、「予見」が重要な機能を果たすと述べられる。「未来」が語られても、それは「過去」を含み込んだ「現在」のあり方から「予見」されるものでしかない。

それに対して「アイオーン」とは、「現在」がつねに「未来」―「過去」に無限定に分割される場面のことを指している。それは、まずは「生成」(devenir) そのものの時間として描かれる（第1のセリー・第2のセリー）。「アイオーン」とは、「生成」としての「流れ」をなす時間なのである。そのことについて考えてみよう。

時間が「流れ」ていくこととは何か。それは、そこで新たなものが生じ、変化そのものが現出していくことにほかならない。こうした「生成」とは、基本的に、「予見」を中心とする「良識」の機能を裏切るものである。だから、新たなものが現出する時間とは、「現在」という中心点を軸に語られてしまう時間ではない。「生成」とは、いつも「現在」の枠組みに固定されることを逃れ、予見不可能な変化が現れていく局面において描かれなければならないのである。それは、キャロルの描くアリスが、同時に大きくもなれば小さくもなる世界である（第1のセリー参照）。「現在」を避けることで、そうした時間にまつわるパラドックスを露呈させることが、「流れ」を掴むためには必要である。それが、「出来事」の時間を見いだしていくことである。

こうした、パラドックスそのものであるような「生成」の時間とは、どのように描けるのだろうか。「事物の状態」である「現在」としての「クロノス」と対比させ、まさに「非物体的」な「表層」の「出来事」において語られるこの時間は、どう定式化されるのだろうか。

第10のセリーでは、こうした「アイオーン」としての時間が、『差異と反復』における「第三の時間」の論述と重ねあわされて提示されていく。「アイオーン」の時間とは、「時間の空虚な形式」としての「直線」と、そこで無限に分割される「未来」―「過去」の位相として描かれるのである。それは、「過去と未来だけが subsister（下位存在）し、それらが、それぞれの現在を無限に、いかに小さなものであれ下位分割 (subdiviser) し、現在を空虚な直線に延びひろがらせる」(p.78) と語られるものである。

つまり、「アイオーン」において「現在」は、その「無限小」の限界にまで「未来」と「過去」とに「下位分割」され、消滅してし

まうのである。それと同時に、そうした無限に分割された「未来」と「過去」とは、そのあり方自身において、際限なく遠い「未来」、無限に遠い「過去」にまで（すなわち「無限大」の遠さまで）、まさに「空虚な形式」として同じ資格において結びついていくのである。「アイオーン」とは、「下位分割」することで「現在」を限りなく逃れながら、同時にそれ自身の「空虚な形式」において、まさに「永遠」と関わってしまうような、（物理的循環ではない）「永遠回帰」の時間として描かれるのである。

ここで「直線」という形象は、「生成」を扱う時間が、「現在」という定点を、「最小限」においてであれ（無限に「下位分割」されるという仕方で）、「最大限」においてであれ（そうした「分割」が「空虚な形式」として「永遠」に延びひろがっていくという仕方で）、逃れ去り解体してしまうことを表現するものである。だからこうした「直線」は、ボルヘスが描くように、まさに「迷宮」と述べられもするものである。無限に分割され、無限に延びひろがるこの時間は、「直線」としての「迷宮」なのである（ボルヘスの文章は、『差異と反復』においても『シネマ』においても、時間を論じる重要な論脈で引用される）。「アイオーン」とは、「現在」という中心軸を欠き、無限に「過去」―「未来」に分割され、「永遠」に繋がっていく「空虚な形式」によって描かれる時間とまとめられる。

では、こうした「アイオーン」の時間において、行為がなされれることとは、どのようなことなのだろうか。

それは、「アイオーン」を形成する「偶然点」(point aléatoire) に、賽の「一振り」(coup) が振り下ろされることであると語られる。考えてみよう。「アイオーン」として描かれる「直線」の時間には、もはや中心はない。だから、そこでなされる行為の「一振り」は、つねに「偶然」に晒されているものである。「一振り」なされるのは、根本的に「偶然点」においてでしかない。「アイオーンとは偶然点が描く直線である」(p.80)。

しかしこうした「一振り」は、「偶然点」に振り下ろされることにより、「特異性の配分」をなすものでもある。それはいわば偶然を肯定し、その肯定において積極的な「出来事」を生みだしていくのである。「それぞれの一振りは、それ自身セリーである。しかしそれは、思考可能な連続した時間の最小限よりもより小さな時間において である。このセリー的な最小限に、特異性の分配が対応する。それぞれの一振りは、特異点を、賽の目（点）を放つ。しかしそれぞれの一振りの総体は、偶然点に含まれる。それは、思考可能な連続した時間の最大限よりもより大きな時間における、あらゆるセリーを貫いて移動しつづける一投である。」(p.75)。

このようにして、「アイオーン」の時間のなかで「特異性」が現れ、そうした「特異性」を軸として、「遊牧的＝ノマド的」な開かれた空間（トポス）における配分が論じられていくのである。

「偶然点」と、そこでの賽の「一振り」に関する議論は、「アイオーン」において描かれる「意味」の第一のパラドックスを、その第二のパラドックスである「特異性の配分」の議論に結びつけていくものである。

〈「特異性」が描く「超越論的領野」(champ transcendental)〉

「意味」の第二のパラドックスを論じるために、まずは「準原因」の議論から始めたい。というのも、「意味」の領野を「準原因」によって描く議論は、そうしたパラドックスの場面である「特異性の配分」が、「超越論的領野」として機能することを明らかにするものであるからだ。

「意味」は「非物体的」なものとして、「事物」がもつ因果関係とは異なった関係をもつと描かれる。そうした「出来事」の領野における関係は、「準原因」(quasi-cause) と名指されるのである。こうした「準原因」のあり方について、とりわけ第14のセリーで議論が展開される。

そこでは、「意味」の領野を「準原因」と名指すことに、二重の内容が見いだされていく。

その一つは、すでに何度も論じたように、「意味」のこの領野を、「非実効的」で「非受動的」で「不毛」な領野、つまりは「中立」的な場面として示していくものである。つまりこの領野を、「事物」の水準で語られる因果性や、そこで働いている「真」「偽」の枠組みとは無関係なものとして記述していくことである。

だが同時に見てとるべきは、この「準原因」の領野が、その機能において、「意味」の「生産」を果たすものでもあるということである。つまり「準原因」の領野は、「意味」の「発生の力能」(p.117) をもっとも描かれるのである。この領野は、「不毛」で「中立」な場面であるが、それ自身はまさに「意味」を産出するものでもある。「準原因」は、この二つの側面から考察されなければならない。

ここでドゥルーズの語り方は、暫しのあいだ現象学的な色彩を帯びる。こうした「準原因」の二重性について、フッサールの議論との平行性が再びとりあげられるのである。

ドゥルーズの考える「意味」の「中立性」と、フッサールの論じるノエマ的なものとの近さについては、すでに述べておいた。ここでは、それに加えて、フッサールが、ノエマ的なものを見いだしたあとに、そうしたノエマ的意味の核において、対象との関係が「超越論的」に「構成」されると論じていくことがとりあげられる。同様の事態を、ドゥルーズは、「意味」がなす「準原因」の領野にも見てとっていくのである。つまりこの領野は、「中立」的であると同時に、「構成」をなす「超越論的領野」でもあるとも描かれていくのである。

そこでは、サルトルも援用される。サルトルが、『自我の超越』において、フッサールの議論を経ながら、まさに「非人称」の（主体がそこで「構成」される）領野として「超越論的領野」をとりだしていく議論が、ここでの「準原因」の提示に重ねあわされもするのである。

つまり、一方で「事物」に対して徹底的に「中立的」なものと語られていた「意味」の領野は、同時に「事物」との「関係」を「構成」していくような、「超越論的領野」(champ transcendental) としても提示されていくのである。それは、「意味」のこの領野が、後に述べられる「静的発生」の基盤であることに、ただちに結びつい

ていくだろう（ただし、ドゥルーズのこうした現象学的な姿勢はアンビバレントであり、ある意味で議論の構図を借りただけのものであるともいえる。すぐにドゥルーズは、フッサールの議論そのものは、「良識」と「共通感覚」に基づいたUrdoxaに関わるものであると断じていく。ドゥルーズ自身は、この「意味」の領野を、「良識」や「共通感覚」によって支配されない、パラドックスの場面として見いだし、そうしたパラドックスの作用そのものにおいて、「静的発生」を記述していくのである）。

ここで少し余談を述べておこう。それはドゥルーズが、最後の論考である「内在――一つの生・・・」（『狂人の二つの体制』所収）において、やはりサルトルの名を挙げながら、こうした「非人称」の「超越論的領野」を、「内在平面」（後期ドゥルーズに独特の用語）として捉え返していくことである。それは、『意味の論理学』のここでの記述と響きあうものだろう。こうした事情は、この「意味」の領域が、「深層」からの「動的発生」とは異なった「静的発生」の場面と描かれるものでありながら、しかしその領野の重要性は、（ある意味で「動的生成」の議論の方向へと踏み込む）後期ドゥルーズの考察に到っても、なお放棄されるものではないことを示している。

さてでは、こうして「超越論的領野」としてとりだされる「意味」の領野は、どのように機能すると描かれるのだろうか。この領野は、まさに「中立的」な場面として、「前個体的」で「非人称的」で「反一般的」なものと記述されていた。それが「意味」を生産する装置になるのは、どのような仕方においてなのだろうか。

そこでこの領野が、「特異性の配分」の場面であったことが考えられなければならない。つまりこの領野が、「アイオーン」における「偶然点」への賽の「一振り」の議論を受けた、「遊牧的＝ノマド」的な空間の形成の場面であることが重要になってくる。それが、「意味」の第二のパラドックスをなすのである。

ドゥルーズは、こうして見いだされてくる「特異性」の機能を、第15のセリーで、つぎの五つの仕方にまとめている。

第一に、「出来事」としての「特異性」は、準安定的なシステムとして組織化される、異質なセリーに対応したものである。それは異質的なセリーに分配されるポテンシャルエネルギーをもっている。第二に、「特異性」は、こうした異質なセリーのパラドックス的な展開に関わるものでありながら、自己統一のプロセスを備えている。第三に「特異性」は「表層」にとりついている。「表層」というこの位置関係は重要である。それは内部＝深層と外部とを「接触」させる局面であるからである。第四に、それゆえに「表層」は「意味の場」であると述べられる。そして第五に、この領野は、「問題設定」(problématique) の場面として規定される。

ここで改めて検討されるべきは、「特異性」に関する「表層」としての位置づけと、その「問題設定」としての規定である。

「特異性」の領野が「表層」と描かれることは、それが「個体化」や「人称化」の場面ではないのと同時に、未分化な「深淵」の領域（後に「一次的領域」と述べられるもの）としても語られえないこ

とを示している。「特異性」の場面は、そうした二者択一的な枠組を逃れるものなのである。「表層」とは、むしろこの両者をつなぐ中間的な領野のことである。「超越論的領野」は、こうした意味で、「前個体的」で「非人称的」ではあるが、同時にそこで「特異性の配分」がなされるものとして、「個体」や「人称」の「発生」に向かう側面においても描かれるのである。

そしてまたこの「表層」は、「問題設定」として規定される。「問題設定」とは、とりわけ第9のセリーで、「出来事」の「理念性」と関連づけられて論じられていたものである。それはまた、『差異と反復』における「問題」の記述にも対応している。

「前個体的」で「非人称的」な「特異性」の場面は、それ自身の積極的な規定として、「問題設定」として描かれるのである。それはまさに、「問題」をたてる領野である。つまりそれは、具体的な「事象」の「実現」(effectuation) である「解決」に到ってはいないが、しかし「実現」に向かう潜在的な力をかたちにすべく配置している、そうした領野なのである。

こうした「問題」を論じる際にドゥルーズがとりあげる例は、『差異と反復』以来、一貫して「微分方程式」である。「微分方程式」は「時間—空間的」に「解決」が果たされることに先だった、潜在的な力の配分を描く「問題設定」そのもののあり方を提示するからである。

そしてまた、こうした「問題設定」は、カント的な「理念」の議論と重ねあわされもする。「問題設定」とは、「理念」的ではあるが、まさに「理念」の領野にある「問題」をたてることとして、それ自身「対象的＝客観的」(objectif) なあり方をもつものなのである。つまり、「問題設定」である「特異性の配分」とは、「事物」の水準（「実現」としての「解決」の水準）に位置するものではないが、しかしそれはたんなる未分化の場面ではなく、「問題」としての「対象性＝客観性」を確保するものとして、まさに「積極性＝定立性」(positivité) (p.148) をもつものとして描かれるのである。

さて、「意味」の第二のパラドックスの場面として、「表層」の「問題設定」であるこうした「特異性」の領野がとりだされることで、「超越論的領野」からの「静的発生」を論じる準備が整ったといえる。「静的発生」に関しては、以上の議論を受けながら、第16のセリーと、第17のセリーにおいて展開されることになる。

4・「静的発生」の構図

＜「静的発生」の二つの水準＞

「超越論的領野」からの「静的発生」は、まずは二つの水準（「存在論的な静的発生」の二つの水準）において語られていく。

「静的発生」の第一の水準は、「特異性」を形成する諸セリーが「収束」し、そこで「個体」とともにひとつの「（環境）世界」（＝Umwelt）が「構成」されていくこととして描かれる。

「実現の最初の水準は、個体化された世界と、その世界それぞれを満たす個体的な私とを相関的に生みだす。個体は、それが包括す

る特異性に隣接して構成される。個体は、この特異性に依存するセリーの収束圏としての世界を表現する」(p.135)。

つまり、「個体」(=「私」)とその「(環境)世界」とは、「特異性」において分岐しているセリーのあいだで「収束」が起こり、そこに「共可能性」(compossibilité)の局面が生みだされることから構成されると記述されるのである。異質なセリーそのものは、「不共可能性」(incompossibilité)というあり方をとるだろう(ちなみに、こうした「不共可能性」の概念は、後に『シネマ』においても、『襞』においても、議論の展開のキーワードになる)。しかし「個体」が描かれる世界とは、「不共可能」的なものである異質なセリーの分岐が「収束」することから導かれるものなのである。「収束圏のなかで特異性を組織化する Umwelt」と「こうした世界を表現する個体」(p.140-141)とが、そこで現出してくることになる。

こうした「静的発生」の第一の水準を描くために、二つのことが述べられる。

一つは、こうした「個体」の位相は、「分析的」なものだということである(「個体は無限な分析的命題である」(p.143))。つまり、ここで生じる「個体」とは、ライプニッツのモナドのように、「収束」するセリーのなかで形成される「(環境)世界」の「出来事」を、「分析的」に「記述」される「述語」として含み込んでいるものと描かれるのである。

もう一つは、この場面で、「方向」を定める作用としての「良識」の原則が導きだされてくることである。すなわち、「生成」においては、「未来」―「過去」へと無際限に「下位分割」されることにより、方向性も中心軸も失った「空虚な形式」として提示されていた場面に、一つの「方向」が設定されていくのである。

そして、「静的発生」の第二の水準は、第一の水準における「個体」と「(環境)世界」Umwelt とを乗り越えて、「人称」と「世界」Welt とが「構成」されていく局面として描かれる。

この第二の水準は、たんなるセリーの「収束」が見てとられる場面ではない。そうした第一の水準を基盤として、ここでは「不共可能的」なものを貫いて、対象の「自己同一性」が導入されることが重要である

ここで問題であるのは、「対象=x」という「自己同一的」なもののあり方である。

「対象=x」は、セリーの「収束」によって描かれる「個体」なのではない。「対象=x」とは、さまざまに異なった Umwelt において、まさに「共不可能的」な「述語」をもつそうした「対象」を、それぞれの Umwelt を貫きながら「同一」のものとして措定する働きから生じるものなのである。だからこの働きにおいては、分岐する「不共可能」的な「出来事」に関わりながら、「自己同一的」な事象を「総合的」に「規定」し(それは第一の水準が、「個体」の「分析的」な「記述」によって描かれたことと対比される)、そこで、「可変的もしくは可能的」なものである「世界」が、「自己同一的」な形式をもって形成されてくることが際だたせられる(p.139)。

こうした Welt に関わるものは、「人称」(「認識する主体」)であ

る。それは、第一の水準における「個体」(=「私」)とは異なって、まさに「自己同一的」な「人称」を構成するものである。そして、このような Welt と「人称」との成立において、「共通感覚」という、「同一化の機能」と関わる原則が導かれてくる。

まとめよう。「静的発生」の第二の水準とは、第一の水準において見いだされた「個体」と「(環境)世界」とを基盤として、それを「自己同一化」的に「総合」するものである。そこでは「いくつかの世界あるいはすべての世界に共通な Welt」「この「共通な何か」を規定する人称」そして「この人称とそこから派生するクラスや諸特性を規定する総合的な述語」(p.141)がとりだされることになる。ここで「自己同一性」という形式から、「クラス」や「諸特性」が派生されることは、「論理的な静的発生」を描いていくつぎの段階にとって大きな意義をもつ。

〈言語の「三次的配置」〉

こうして、「意味」の領野が「超越論的領野」として「構成」を果たしていく、二つの水準が見いだされた。それは、セリーの「収束」からなる「個体」と Umwelt の水準、それらの「自己同一化」からなる「人称」と Welt の水準であった。このようにして「静的発生」は、「前個体的」で「非人称的」な「特異性」の働きから、「個体」と「人称」とを「実現」させていくのである。こうした「構成」は、まさに「存在論的」な「静的発生」と名指される。

ところで、「存在論的」な「静的発生」には、さらに「論理的」な「静的発生」が重なりあう。そこで、言語の「三次的配置」の成立が、具体的に語られる。

つまり、これまでは言語を、「意味」とそのパラドックス的な働きに引き戻すことに向けられていた論述が、今度は方向を逆転させて、「意味」から言語の成立を跡づけるかたちで展開がなされていくのである。こうして言語は、「超越論的領野」において、さしあたりの基礎づけを見いだすことになる(さしあたり、というのは、こうした「表層」からの「静的発生」は、この書物の後半で、「一次的領域」からの「動的発生」に、さらに晒されることになるからである)。

こうした「論理的」な「静的発生」は、つぎのように語られる。まず「存在論的」な「静的発生」の第二の水準では、さまざまな Umwelt を貫いた「自己同一性」をもつ「人称」と Welt とが形成されるが、そこにおいて、「多様なクラスと可変的な諸特性」(p.143)が見いだされていた。こうした要素は、まさに「論理的命題一般の可能性の条件と形式」の「構成」に結びつくものである。そこで「個体」と「人称」とは、こうした「可能性」を「実現」するための、「質料的審級」の役割を果たすと描かれる。それは、「条件付けられたものの実在への必然的な連関を、論理的命題において決定する」ものなのである(p.143)。

つまり、「個体」との関係として描かれる「指示作用」、「人称」との関係として描かれる「表出作用」が、ここで規定されていくのである。そしてさらに、そこでの「可能性の形式」が、「意味作用」

の関係をも規定することになる。このようして、一連の議論のはじめでとりあげられていた、「指示作用」「表出作用」「意味作用」という言語の三つのカテゴリーが、「意味」の領野からの「発生」に従って提示されることになる。

しかし、「個体」と「指示作用」、「人称」と「表出作用」、「多様なクラスもしくは可変的な諸特性」と「意味作用」とは、それぞれ単純に対応しているわけではない。「指示作用」は「個体」の場面に深く関わるが、それを超えて「人称」的な「同一性」の場面をも必要としている。また「人称」は「表出作用」に関わるとしても、それもまた「個体」に無関係ではない。さらに「意味作用」は「個体化」において導きだされる「良識」、「人称」に起源づけられる「共通感覚」を想定している。だからそれらは「非常に複雑な構造」をなすことになる。「指示作用」「表出作用」「意味作用」がそれぞれに相互に関わるような、こうした構造の総体が、言語の「三次的配置」(p.144) を描いていくのである。言語はこうして、「意味」から姿を現してくる。

〈中間休止〉

ここまでの議論が、『意味の論理学』の前半部の概要をなしている。後半の論述に向かうまえに、簡単に整理しておこう。

まず重要であったことは、「意味」が、「指示作用」「表出作用」「意味作用」とは区分された、別の領野に位置づけられることであった。それは、「個体」、「人称」、「概念」からは「中立」的に切り離された、「真」「偽」とは関わらない位相に設定される。それゆえに「意味」は、「意味作用」の形式をとるならば、パラドックスに晒されるものとして描かれる。それは、「過剰」な「シニフィアン」(＝「意味」) と、「不足」する「シニフィエ」(＝「指示」する「名」) という二つの「不均衡」なセリーによって形成され、そこで「パラドックス的要素」が転位していく場面である (「自分自身の意味を語る語」)。こうして、「無限退行」と「悪循環」という二つのパラドックスが、キャロルの「秘境語」の分析を介して見いだされていく。

そこから先に、「意味」の二つのパラドックスがとりだされる。その一つは「アイオーン」としての時間に関わる。そしてもう一つは「特異性の配分」として、開かれた空間に関わる。これらは「意味」そのものの領野として、セリーからなるパラドックス的なものである。

そこで「準原因」の議論を経て、「意味」の領野は、たんに「中立」的なものではなく、対象との関係を「構成」していく「超越論的領野」であることが明らかになる。さらに「特異性」は、「表層」において、「積極的＝定立的」な「問題設定」をなすものとして見いだされる。こうして「特異性の配分」は、「静的発生」の議論に結びつく。

「静的発生」は、「個体」と「人称」とを形成する「存在論的」な「発生」と、それに基づく「論理的」な「発生」としてとりだされるが、こうした「発生」の総体によって、「指示作用」「人称作用」

「意味作用」として提示される言語の成立が見届けられる。

「真理」に関わる場面から、「意味」の領野へとパラドックスを利用して降り下ること。そこでの「意味」の独自の存立と機能とを、構造主義が明らかにした成果として見いだし、さらにそれを、「出来事」に関するドゥルーズ自身の存在論に結びつけていくこと。そして、こうした「意味」の領野からの、言語の「発生」を跡づけること。これが、ここまでの論述の概要をなすものであった。

しかしこうした、「二次的組織化」である「意味」の領野から、言語の「三次的配置」を描いていく行程は、すでに何度も述べたように、ついで未分化の「深層」である「一次的領域」が露呈されることにより、根底から組みかえ直されることになる。ここまでの「静的発生」の記述は、「深層」からの「動的発生」の検討へと、さらに展開されていくのである。

そうした「深層」を扱う『意味の論理学』後半の議論を見ていくこととしよう。

（続く）

引用

Gilles Deleuze, *Logique du sens*, Les éditions de minuit, 1969.

Sur la genèse statique et la genèse dynamique dans *'Logique du sens.'*

HIGAKI Tatsuya

En écrivant son deuxième ouvrage principal, c'est-à-dire *'Logique du sens',* Gilles Deleuze a développé sa théorie du 'devenir' dans deux directions.

D'une part, il commence à traiter du langage. Il trouve la phase du 'sens' à la 'surface', qui se distingue de la 'désignation', de la 'manifestation', de la 'signification'. Il appelle cette phase 'organisation secondaire', et définit le processus de la constitution du langage à partir de cette phase comme 'genèse statique'.

D'autre part, il ouvre une nouvelle voie pour chercher le fond du 'devenir'. C'est 'l'ordre primaire' dans lequel on peut parler du 'Corps sans organs'. Il détermine la formation de la 'surface méta-physique' comme 'genèse dynamique'.

Dans cet essai, je me concentre sur l'étape de la 'genèse statique' en éclaircissant le 'sens' de plusieurs points de vue. Selon Deleuze, on peut avoir accès au 'sens' seulement par les 'paradoxes' dont les exemples présentent les oeuvres de Lewis Carroll. En considérant les 'paradoxes', on peut mettre le 'sens' en rapport avec 'l'événement' et discuter cette phase comme 'champ transcendental' où les singularités sont distribuées. Dans ce champ, les 'individus' (fondement de la 'désignation'), les 'personnes' (fondement de la 'manifestation') et les 'classes' et les 'propriétés' (fondement de la 'signification') apparaissent et le système du langage ('l'ordonnance tertiaire') se construit.

Key words

Deleuze, langage, événement, devenir, paradoxe